様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１９９７７

研究課題名（和文）ホワイトヘッドの「思弁哲学」研究：19-20世紀の科学哲学との関連から

研究課題名（英文）A Study of Whitehead's "Speculative Philosophy" : In Relation to 19th and 20th Centuries Philosophy of Science

研究代表者
有村　直輝（Arimura, Naoki）

立命館大学・文学部・授業担当講師

研究者番号：５０９６７１１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ホワイトヘッドが「思弁哲学」と呼ぶ哲学的方法論の詳細とその形成過程を、19-20世紀の科学哲学との関連から明らかにすることを試みた。具体的には、まず、ホワイトヘッドが、C. D. ブロードの議論を批判的に参照しながら、自身の「思弁哲学」を、われわれの想像力を活性化しうる領域横断的な仮説構築のための方法として定義していることを明らかにした。さらにホワイトヘッドの「仮説」観にはウィリアム・ヒューエルの仮説観からのダーウィンを介した間接的な影響が考えられることを示した。加えて、20世紀の実在論と観念論の議論を検討しながら、ホワイトヘッドが属していた知的状況を整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、新資料の講義録や19・20世紀の哲学文献の読解を通して、しばしば哲学史上の孤立した存在として扱われるホワイトヘッドの哲学を当時の思想状況のうちに位置づけ、さらにその哲学的方法論の形成過程を明らかにした点にある。また、ホワイトヘッドの哲学的な方法論は、専門分化の進みつつあった当時の時代状況にあって、領域横断的な思考の可能性を模索するなかで構築されたものだったと言え、本研究の成果は、今日において学際的な研究のあり方を考えるうえでの一つの手がかりを提供しうるものであり、この点に社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to reveal the details and development of Whitehead's philosophical method, called "speculative philosophy", by investigating its relevance to the philosophy of science in the 19th and 20th centuries. Specifically, I revealed that Whitehead, with critical reference to C. D. Broad's claim, defined his speculative philosophy as a method for constructing transdisciplinary hypotheses that can cultivate our imagination. I also showed the possible influence of Whewell's view of hypothesis on Whitehead through C. Darwin. In addition, I clarified the intellectual situation to which Whitehead belongs by examining the debate between realism and idealism in the 20th century.

研究分野：哲学

キーワード：ホワイトヘッド　思弁哲学　科学哲学　仮説　想像力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

20 世紀に活躍したイギリス出身の数学者であり哲学者の A. N. ホワイトヘッド（1861-1947）は、自身の哲学的な方法論を「思弁哲学」と呼んでいた。彼が自らの方法論をこのように呼ぶ理由やその背景については資料の不足もあり、これまで不明な点も多かった。しかし、2017 年から、ホワイトヘッドの講義記録を編纂した資料の刊行が始まり、彼の哲学の形成過程や彼が当時参照していた文献などを詳しく調査することが可能になった。報告者はこれまでの研究の中でこの新資料の読解を行ってきたが、その過程で、ホワイトヘッドが自らの方法論を確立していく背景には、当時の科学と哲学をめぐる状況があったことが見えてきた。

ホワイトヘッドが生まれた 19 世紀は、科学の専門分化が進み、各分野で多くの成果が上げられつつあった時代であった。それと共にこの時代には、科学の扱う対象や方法論などを哲学的に考察する、現在で言うところの「科学哲学」の議論が登場してもいる。そして、ホワイトヘッドが哲学の仕事に本格的に取り組み始める 20 世紀前半には、科学がますます発展する状況の中で、哲学はどのようにあるべきかが問われてもいた。報告者のこれまでの研究の過程で、ホワイトヘッドは、こうした時代状況や当時の科学哲学の議論などを意識しながらも、あえて「思弁哲学」という一見時代の潮流に合わないかに思える呼称を使い自身の方法論的な立場を示していること、しかしそれは単なる時代への逆行を志向するものでもないことが見えてきた。そこで、ホワイトヘッドの哲学を 19・20 世紀の科学哲学の議論の文脈から読み解くことによって、彼の「思弁哲学」の特質やその形成過程が明らかにできるのではないか、また、彼のこの方法論を「科学隆盛の時代における哲学の役割とは何か」という当時の哲学が直面していた問題に対する一つの解答として提示されたものとして解釈できるのではないか、と考え、本研究課題を設定するに至った。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえた本研究の目的は、ホワイトヘッドの思考の方法論である「思弁哲学」の内実とその形成過程を明らかにすることにあり、さらに、19・20 世紀の科学哲学の文脈に彼の哲学を関連付けることによって、彼のこの方法論が「科学の時代における哲学の役割とは何か」という当時の哲学者たちが直面していた問題の一つの解答として提示されたものであることを明らかにすることにある。

３．研究の方法

以上の目的の達成のため、本研究では、ホワイトヘッドの思想の形成過程を探るために新資料である講義録の読解を行うと共に、19・20 世紀の特にイギリスの科学哲学の文献の精読を行った。具体的には、まず、20 世紀の哲学者の中でも、ホワイトヘッドが「思弁哲学」の立場を表明するうえで大きな役割を果たしたと考えられる哲学者 C. D. ブロードの『科学的思考』（1923 年）を読解し、ブロードの主張とホワイトヘッドによる批判を精査した。さらに、ウィリアム・ヒューエルなどの 19 世紀ヴィクトリア朝時代の科学哲学者の文献を精読し、ホワイトヘッドの哲学的な方法論のうちにその影響が見られるかどうかを彼の著作および講義録の読解を通して吟味した。

４．研究成果

2022 年度には、ホワイトヘッドの「思弁哲学」の形成過程を、彼と同時代の 20 世紀の科学哲学、特に C. D. ブロードの哲学との関連から探った。1923 年の『科学的思考』の中でブロードは、科学が急速に発達する時代にあって、科学者から哲学が無用の学問とみなされつつあり、哲学は自らの仕事を再考すべき状況にあることを指摘している。そして彼は、哲学のタイプを、科学の基礎概念の分析を行う「批判哲学」と、宇宙論的・形而上学的な探究を行う「思弁哲学」とに区別したうえで、前者こそが今の哲学が専念すべき仕事であると主張している。このブロードの議論を整理したうえで、本研究では次にブロードの主張に対するホワイトヘッドの評価を確認した。1924 年の講義のなかで、ホワイトヘッドはブロードが「批判哲学」と呼ぶ哲学の意義を認めつつも、彼自身はむしろブロードが否定的であった「思弁哲学」の立場を取ることを明言し、この哲学の再定義を試みている。そして、ホワイトヘッドは「思弁哲学」を、科学だけでなく芸術や宗教などを含む複数の領域の横断的な理解を可能にするような「仮説」構築の方法論であると定義し、哲学の役割は新たな仮説の提示によって、科学を含むさまざまな領域での「想像力」を刺激し育むことにあると見ていたことを明らかにした。以上の考察を通して、ホワイトヘッドは、ブロードとは別の仕方で科学の時代における哲学の役割を示そうとしていたことが明らかとなった。本研究成果については、2022 年度に関西哲学会第 75 回大会で報告を行った（学会発表「ホワイトヘッドの「思弁哲学」の形成について――C. D. ブロード批判からの考察」）。

また、翌年同学会の学会誌『アルケー』には同タイトルの論文が掲載され、当論文は優れた論文として 2023 年度の関西哲学会研究奨励賞を受賞した。

最終年度である 2023 年度には、ホワイトヘッドの哲学と 19 世紀の科学哲学との関連を探った。具体的には、ホワイトヘッドの再定義する「思弁哲学」が「仮説」を鍵概念としていることに注目し、科学的探究における「仮説」の機能を考察していた 19 世紀のウィリアム・ヒューエルや J. S. ミルなどのヴィクトリア朝の哲学者たちがホワイトヘッドの方法論に与えた影響について検討を行った。講義録や公刊著作においてホワイトヘッドはヒューエルたちの哲学的な態度や方法論を批判しており、一見したところヴィクトリア朝時代の科学哲学からの積極的な影響はないかに見える。しかしホワイトヘッドは「思弁哲学」の立場を確立する過程でチャールズ・ダーウィンの仮説観を参照しており、そしてダーウィンはヒューエルの仮説観を受容していることから、ヒューエルの仮説観がホワイトヘッドの哲学に間接な仕方で受け継がれていると考え得ることが本研究のなかで明らかになった。以上の研究成果については 13th International Whitehead Conference において“Speculation and Hypothesis: A Historical Investigation”という題目で報告を行った。なお、2023 年度内には間に合わなかったものの、発表内容を論文化したものが“Whitehead and Victorian Philosophy of Science: A Historical Investigation of the Concept of Hypothesis”という題目で海外ジャーナル Human Affairs に 2024 年 6 月に掲載された。

また研究期間中には 19・20 世紀の英語圏での観念論と実在論の論争に関する研究成果も発表をしており、特に論文集『世紀転換期の英米哲学における観念論と実在論：現代哲学のバックグラウンドの探究』に寄稿した論文「計画の実行、またはやり直し：ボザンケから見た世紀転換期の観念論と実在論」では、新ヘーゲル主義の哲学者のボザンケによる 1920 年時点でのホワイトヘッドの科学哲学の評価を取り上げた。この研究は、2022 年度に『プロセス思想』に掲載された論文「T. P. ナンとホワイトヘッド」と共に、20 世紀の哲学者たちが科学の世界観と両立しうるような哲学を追求していたことを示すものであり、1924 年以降自らの「思弁哲学」の構築へと進むホワイトヘッドが当時置かれていた知的文脈を明らかにしたものである。

以上の研究成果によって、これまで十分明らかでなかったホワイトヘッドの「思弁哲学」の形成過程を明らかにすることができた。また、しばしば哲学史上の孤立した存在として扱われてきたホワイトヘッドの哲学を、世紀転換期の科学哲学および当時の知的状況と接続しつつ、彼の選んだ方法論的立場の特異性を示すことができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 有村直輝	４．巻 22
２．論文標題 T．P．ナンとホワイトヘッド	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『プロセス思想』	６．最初と最後の頁 5-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32242/processthought.22.0_5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 有村直輝	４．巻 31
２．論文標題 ホワイトヘッドの「思弁哲学」の形成について――C．D．ブロード批判からの考察	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『アルケー：関西哲学会年報』	６．最初と最後の頁 63-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Arimura Naoki	４．巻 -
２．論文標題 Whitehead and Victorian Philosophy of Science: A Historical Investigation of the Concept of Hypothesis	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Human Affairs	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/humaff-2024-0015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 有村直輝
２．発表標題 ホワイトヘッドの「思弁哲学」の形成について―C．D．ブロード批判からの考察
３．学会等名 関西哲学会第75回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Naoki Arimura
２．発表標題 Speculation and Hypothesis: A Historical Investigation
３．学会等名 13th International Whitehead Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 染谷昌義、小山虎、齋藤暢人、有村直輝、伊藤遼、入江哲朗、大厩諒、岸本智典	４．発行年 2024年
２．出版社 特定非営利活動法人ratik	５．総ページ数 206
３．書名 世紀転換期の英米哲学における観念論と実在論：現代哲学のバックグラウンドの探究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関